

熊本理抄編著／藤岡美恵子、宮前千雅子、福岡ともみ、石地かおる、のびこ、瀬戸徐映里奈、坂東希、川崎那恵著（エトセトラブックス、2025年）

部落フェミニズム

大室 恵美*

新しい概念を知れば、偏見や差別がなくなるの
だろうか。新しい理論を使えば、自動的にそれま
での限界を克服し、フェミニズムを発展させるこ
とができるのだろうか。インターセクショナルリ
ティ（交差性）という概念の「流行」（22頁）からし
ばらく経った現在でも、出自や階級、民族性の話
になると途端にそれらを「なかったこと」にする
マジョリティ女性の姿が浮き彫りになる本書に触
れると、それらの問いに無邪気にYESと答えられ
なくなる。

本書は単に、フェミニズム理論やジェンダー研
究において部落女性が言及されてこなかったと指
摘するものではない。確かに一握りの意欲的な
フェミニストや研究者が部落女性について叙述を
試みたことはある。しかし部落女性自身の語りは
きちんと場を与えられ、十分に聴かれてきたのだ
ろうか。マジョリティ女性たちは自分の問題だけ
に熱心でその声を無視してきたのではないか。そ
のような問題意識から、部落女性たちの生が語ら
れる場をフェミニズムの中で、「部落フェミニズ
ム」という名の下で確実に作り上げる、それが本
書のねらいである。

著者陣は被差別部落出身という共通項で結ば
れているが、9章からなる本書を読み通すと共通
性だけでなくそれぞれの固有の経験も明らかにな
る。アプローチ方法ひとつ取ってみても、反差別
国際運動（IMADR）で活動してきた経験を背景に
フェミニズムにおける部落女性の透明化をレイシ
ズムと位置付けて論じる藤岡美恵子（第1章）や、
歴史学専攻の大学生時代に女性史にも部落史にも
部落女性が登場しないことに違和感を抱き、部落
女性たちの残した文章を採し、集めてきた宮前千
雅子（第2章）、1995年の沖縄少女レイプ事件を契
機に性暴力やDV被害者、そして両親の経験に注
目して、フェミニストカウンセリングや世代間ト

ラウマという観点から考察する福岡ともみ（第3
章）、1930～40年代生まれの4人の部落女性の語
りを通して、部落／部落民を捉え直し、部落女性
が常に客体化される状況からの脱出を試みた川崎
那恵（第8章）、8つの章を概観しながらマジョリ
ティの特権性を改めて問い「複合差別」概念が浸
透すればするほど部落女性の存在が抹消されてい
くことを指摘した熊本理抄（第9章）と多岐に渡
る。またさらに複数のカテゴリーにまたがる生を
紡いできた経験も語られる。24時間介助が必要な
脊髄性筋萎縮症（SMA）を持ち自立生活を営みな
がら相模原障害者殺人を記憶する活動、出生前診
断反対運動、優生保護法国賠訴訟支援などの社会
運動を行ってきた石地かおるは、差別が人間の
尊厳を根こそぎ奪うことを経験から指摘し、時に
正義や規範がそのような差別を助長することを看
破する（第4章）。部落差別と優生思想の結びつき
に言及しながら、介助される側とする側の相互作
用を介助者の側からの経験に基づいて明らかにし
たのは「のびこ」だ（第5章）。部落出身で在日朝
鮮人でもある瀬戸徐映里奈は「混血」（155頁）と
しての部落フェミニズムを提示し、食をめぐる文
化や労働、経済の動きにマイノリティ女性たちの
経験を映し出そうとする（第6章）。瀬戸徐が言
及する、近代化の中で新しく移り住んできた人も
含めて再編成される部落で差別だけが根強く残っ
てしまう状況について、両親が「外」から入った
（186頁）という坂東希は「あんたにはわからへん」
（203頁）という言葉を投稿けけられてきた経験か
ら、誰が誰をなぜ部落民とみなすのか、理由や基
準が曖昧かつ流動的であることを示す（第7章）。

さまざまな角度から繰り返し示される、全体を
貫く重要な論点は以下の二つに集約されるだろ
う。第一に、既存のフェミニズム／フェミニスト
への批判である。マジョリティ女性たちは部落差

* お茶の水女子大学人間科学創成科学研究科博士後期課程

別自体を知らないのではなく、知った上で、部落女性の経験をフェミニズムの課題には当たらないと除外していることが指摘される。「でもわざとじゃない、悪意があつてのことではない。私だって自分の問題で精一杯だ」と言いたくなる人もいるかもしれない。しかし無意識に優先順位を下げて、いつしか忘れてしまうその回路こそ藤岡が指摘するレイシズムである。マジョリティ女性は言い訳や反論をせず口を閉ざして、後回しにされて忘れられてしまう側の、「存在が抹消される部落女性の直面する無力感と恐怖感に思いをはせてほしい」(252頁)という言葉の正面から受け止めるべきだ。そして「部落女性の経験を日本社会の女性の経験の一部として知り、理解」(15頁)し、その部落差別の経験と自らの関係を「フェミニズムの課題として考え」ることが必要なのである。またその際には、被差別経験からくる部落女性の感情に関して「集团的に、歴史的に、そして構造的に継続してきたものではないか」(宮前、56頁)という視点で、多角的な検討が求められる。たとえば『私とあなた』の間の権力性を自覚し、近代的権力性から対等性へと志向する」(104頁)福岡に、どのように応えることができるだろうか。特に本書で具体的に批判されているフェミニストや学会は、真摯に受け止め誠実に応答すべきだろう。ここでまた無視をして無関心を決め込むならば、見たいものだけを見て都合の良い時にだけ「批判的精神」を発揮するのであれば、それはフェミニズムなのだろうか。もしかしたらいざ応答しようとしても「あんたにはわからへん」と言われるかもしれない。しかしその程度で諦めるのは早い。一度や二度拒絶されたくらいで機嫌を損ねるならば「部落女性の声を聞いてくれてありがとう」と言われたいだけだと言われても仕方がない。「あんたにはわからへん」は、「その人の痛みやその人が見ている世界をわかろうとする人に向けられる言葉のようにも思えてくる」(204頁)も

のなのだ。

第二の点は、このような既存のフェミニズム／フェミニストへの批判を受けて提示される、部落女性の生の営みに即した「部落フェミニズム」の名乗りである。「部落フェミニズム」は「本書執筆者たちの創造物でも独占物でもなく」、「差別と抑圧のなかを生きたすべての部落女性」が生きてきたものである(11頁)。本書が発売された2025年に初めて「部落フェミニズム」が誕生したのではない。部落差別を受けてきた女性たちに共通で固有の経験は、本書だけでも100年前に遡ることができる。たとえば川崎が扱った4人の語りも「部落解放の思想・運動がもたらした彼女たち自身の自己変革は、彼女たちの個人的な経験というレベルを超えて」(220頁)いるのである。また「戸籍や出身によって安定した労働から排除され、結婚差別の被害にあっていた部落女性の就労・生活形態は、一般の貧困問題に押し込めることのできない独自の問題性を孕んで」(153頁)いる。そのような共通かつ固有の経験を提示する「部落フェミニズム」は、石地の母のように部落差別によって「他者との交わりで自分を成長させ解放し安心や喜びを得ることを奪われてきた」(136頁)人たちをつなげるプラットフォームのような可能性も持つだろう。そしてこれは既存のフェミニズムに「付録をつくらうとしているのではない」(11頁)。これまでのフェミニズムを変えずに部落フェミニズムを「付け足す」のでは差別を温存したままとなる。求められているのはマジョリティ女性自身の変革であり、既存のフェミニズムの解体であり、これ以上部落女性に努力や我慢を強いることではないのだ。差別をなくすという責務から逃げる「寝た子を起こすな」言説(28頁)は未だ根強い。マジョリティ女性はもう寝たふりはやめて、いい加減起きよう。「寝た子は起こそう(中略)起きて寝てまた起きたら、私たちがここにいる」(148頁)のだから。